

<注意>問題用紙は両面印刷のもの1枚、解答用紙は1枚である。解答はすべて解答用紙に記入すること。解答に用いるアルファベットの文字は必ずブロック体の大文字で書くこと。あいまいなものは採点の対象にしないことがある。

I. (該当者のみ) 全学共通科目としてこの科目を履修している場合、これをA群それともB群のどちらで登録しましたか。解答用紙に正しく○印を下さい。

II. 次の記述中の空欄を埋めるために最も適切な用語を選び、その組み合わせとして正しいものを、A~Eの中から選んで答えなさい。

1. 夢の(①)は、フロイトの言う「類型夢」に顕著であり、誰でも見るような夢が一定の観念に対応し、たとえば妊娠の観念は(②)、分娩の観念は(③)で示される。

① a 象徴性 b 予知作用 c 個性 d 神秘性

② a 天から聞こえる声の夢 b 宝くじが当たる夢 c 虫にたかられる夢 d 日が昇る夢

③ a 複雑な機械の夢 b 水に落ちる夢・水から出る夢 c 迷路の夢 d 表彰される夢

A (①a②d③c) B (①b②b③d) C (①c②a③a) D (①d②a③b) **E (①a②c③b)**

2. フロイトは、夢の機能として、「(①)の番人」という考え方を示しており、ここから夢は「(②)な質を持つ」としている。

① a 無意識 b 睡眠 c 性 d 死の世界

② a 自己中心的 b 深層 c 保守 d 天上

A (①b②b) B (①c②b) C (①d②d) D (①a②c) **E (①b②a)**

3. フロイトは、夢は三層から成るとみなしている。実際に見られたままの夢を(①)、それを作り出す元になった働きを(②)という。また、その際に夢形成の基礎的な原質となる幼児期の記憶を(③)という。

① a 顕在内容 b 客観夢 c 夢舞台 d 直接夢

② a 転移 b 個性化思考 c アクティング・アウト d 潜在思考

③ a PTSD b 隠蔽記憶 c 無意識の欲望 d 変身願望

A (①a②d③c) B (①b②b③d) C (①c②c③a) D (①d②a③b) E (①a②a③d)

4. 心的な事象が身体的な機能に影響することは経験上知られているが、そのうち、身体的な機能異常が実際に存在する場合を(①)でなくむしろ(②)と呼び、喘息などが典型例であるが、(①)と(②)の区別は必ずしも明瞭ではないこともある。たとえば「球症候群」は(②)の一つともとれるが、古典的な(③)の変異型ともとれる。

① a 精神病 b 神経症 c 心身症 d 人格障害

② a 精神病 b 神経症 c 心身症 d 人格障害

③ a ヒステリー球 b 解離症状 c 条件反射 d ホメオスタシス

A (①a②b③d) **B (①b②c③b)** C (①b②c③a) D (①c②b③c)

E (①d②a③b)

5. 会食場面や公衆便所を過度に避けたり、(①)することを恐れる状態、および、自分が悪い臭い等を発散していると確信する(②)症候群を、日本では、まとめて(③)と呼んできたが、最近の欧米の診断学では、前者は主に(④)に含まれる。

① a 道徳的に墮落 b 自己表現 c 失敗 d 赤面

② a 自我消滅 b 迷惑 c 自意識過剰 d 自己意識

③ a 広場恐怖 b 神経質 c 対人恐怖 d 回避性人格障害

④ a Hypochondriasis b Social Phobia c Anxiety Disorder d Depressive Neurosis

A (①c②c③b④c) B (①d②a③c④b) C (①a②b③d④d) D (①b②d③a④c)

E (①a②c③b④a)

6. 「喪の過程」もしくは「喪の仕事」は、(①)から(②)を経て(③)に至る心的過程である。

① a 心的外傷 b 対象喪失 c 対象の取り込み d 自己異物化

② a 対象による癒し b 対象喪失 c 対象の取り込み d 心的代謝

③ a 対象再建 b 自己治癒 c 個性化 d 性的成熟

A (①a②a③b) B (①a②d③c) **C (①b②c③a)** D (①c②b③d) E (①d②d③b)

7. 「喪の過程」を、リビド(リビド)発達の見点から見ると、最初に(①)期が、次に(②)期が関与していると考えられている。

① a 口唇 b 乳房 c 肛門 d 尿道

② a 口唇 b 乳房 c 肛門 d 尿道

A (①b②c) B (①c②b) C (①d②a) D (①a②d) **E (①c②a)**

8. 上記の問題「7」の考えを提示したのはフロイトの弟子の(①)であるが、フロイトはそれに先立ち、(②)という疾患を範例として「喪の過程」を定式化している。また、講義で紹介した「いざなみ症候群」の症例で、治癒に向かう時期に、「登攀」の夢が多くなったことを、次のようなフロイトの(③)に照らして考えれば、「喪の過程」のリビド論に、(④)期を加えることができる。フ